福岡市埋蔵文化財調査報告書第571集

井尻（いじり）B遺跡6

－第8次調査報告－

1998

福岡市教育委員会

序　文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

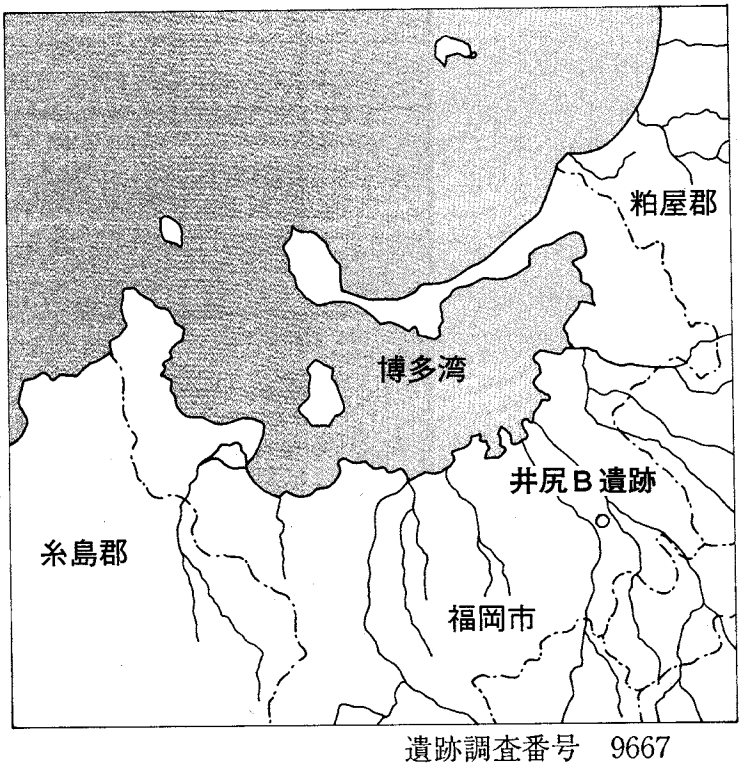
今回報告します井尻Ｂ遺跡群８次調査では多くの貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜り、心からの謝意を表します。

平成10年２月10日

福岡市教育委員会
教育長　町田英俊



遺跡調査番号　9667
遺跡番号　IZB－8

例　　言

1．本書は南区井尻１丁目13番地内における井尻団地立替え事業第１工区に伴い、福岡市教育委員会が平成８年度（1996年度）に実施した井尻Ｂ遺跡群第８次調査の発掘調査報告書である。
2．遺構の実測は長家伸、平本恵子、花田則子が行った。
3．遺物の実測は長家、林田憲三が行った。
4．製図は長家、山野妙子が行った。
5．遺構写真は長家が撮影した。
6．遺物写真は長家が撮影した。
8．遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
9．本書で用いる方位は磁北であり、真北から６°21′西偏する。
10．本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
11．本書の執筆・編集は長家があたった。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査体制……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　調査の記録……3
　１．試掘調査……3
　２．調査概要……3
　３．調査区土層……7
　４．出土遺物……7
　５．小結……7

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……2
第２図　対象地全体図及び試掘トレンチ位置図(1/1,000)……4
第３図　調査区位置図(1/500)……5
第４図　調査区全体図及び調査区土層図（1/100、1/200）……6
第５図　出土遺物実測図１(1/3)……8
第６図　出土遺物実測図２(1/3)……9
第７図　出土遺物実測図３(1/3)……10
第８図　出土遺物実測図４（1/2、1/3）……11

写真目次

写真１　作業風景……12
写真２　調査区全体（東から）……12
写真３　調査区西壁土層……12
写真４　調査区南壁土層……13
写真５　西側トレンチ（東から）……13
写真６　出土遺物……13

遺跡調査番号	9667		遺跡略号	IZB-8
調査地地番	南区井尻１丁目13番地内		分布地図番号	25-0090
工事面積	13,144m²(1･2工区全体)		調査対象面積	600m²
調査実施面積	113m²	調査期間	平成９年２月３日～平成９年２月28日	

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経過

平成３年９月に住宅・都市整備公団九州支社　支社長田代達也氏より埋蔵文化財課長宛に南区井尻１丁目13番地内　井尻団地13,144㎡の立替え事業に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。(事前審査番号3-1-658)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻Ｂ遺跡群に隣接しているため、これを受けて埋蔵文化財課では平成３年12月３日に事業地内で空き地となっていた都市計画道路予定地において予備的な試掘調査を行った。この結果道路予定地内では弥生土器・須恵器・瓦が出土し、ピットを確認した。団地立替え事業地内にも遺構が広がる可能性が高いと判断されたため、平成３年12月９日付け、福市教埋第429号で対象地に遺跡がある旨の回答を支社長あてに行った。

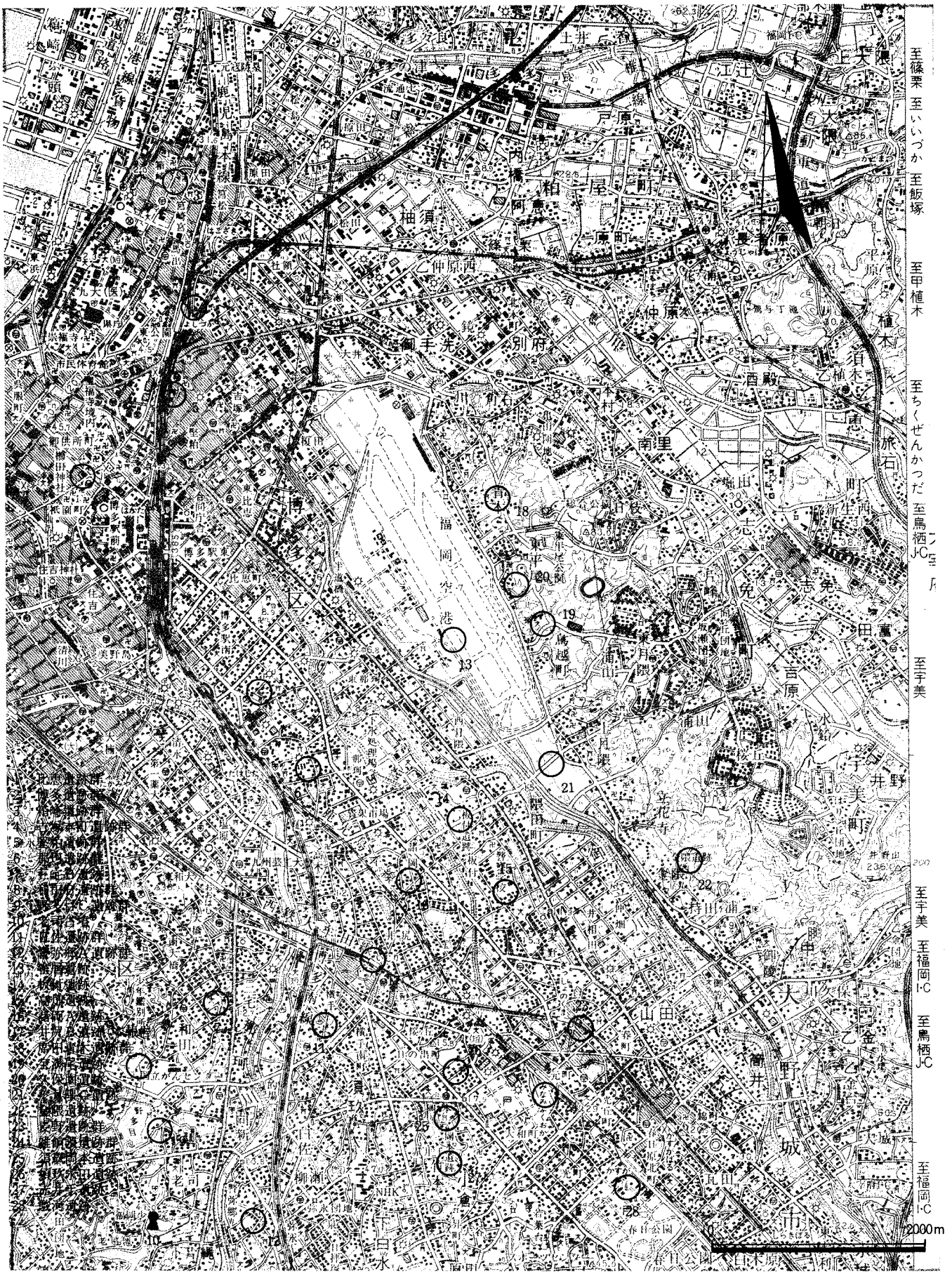
この後事業の進捗に合わせ既存住宅の撤去後に試掘調査並びに本調査を行うこととした。今回の報告の対象となるのは、平成７年度事業地である第１工区についてである。第１工区では平成７年７月11日に試掘調査を行った。対象地内では台地の落ち際とこの東側に堆積する厚さ20cm～50cm程度の包含層を確認した。また台地上は削平が著しかったものの一部でピットを検出した。この結果を受け平成７年７月21日付け、福市教埋第294号で九州支社長野村安広氏宛に第１工区内に遺跡が存在する旨の文書を提出し、その取扱についての協議方を依頼した。協議の結果包含層部分でも特に遺物の出土量の多かった部分について発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。

発掘調査は平成９年２月３日～平成９年２月28日の期間で行った。調査対象地は約600㎡であるが工事用のプレハブ等があったため、実際の調査面積は113㎡となった。また遺物はコンテナ17箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては住宅・都市整備公団九州支社を始めとして、地元井尻団地住民の方々にはご理解を得ると共に多大なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2．調査体制

事業主体　住宅・都市整備公団九州支社
調査主体　教育委員会埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課長　荒巻輝勝　　第２係長　山口譲治
調査庶務　第１係　小森　彰
調査担当　第２係　長家伸
調査作業　柳瀬伸　脇田栄　寺園恵美子　安元尚子　平本恵子　永田優子　指原姶子　花田則子
整理作業　池聖子　大音輝子　吉村智子　小池温子　中村幸子　増田ゆかり　草場恵子　高津千尋
小路丸良江　山野妙子　今林加津江



第１図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

福岡平野は東部を流れる御笠川、中央部を貫流する那珂川により形成され、両河川に挟まれた洪積台地上に井尻Ｂ遺跡は立地する。この台地は須玖丘陵およびこれから派生する台地群で、この中に小規模な谷が多く入り込み、複雑な地形をなしている。しかし現在では都市化による開発のため起伏の少ない平坦な状況を呈している。井尻Ｂ遺跡は須玖丘陵が標高を下げ、低平な台地となる境界付近に位置し、標高はおよそ11m～18mを測る。

井尻Ｂ遺跡の調査では古くは先土器時代の遺物から出土しているが、弥生時代中期～古代にかけて特に濃密な分布を示し、貴重な遺構・遺物が多数確認されている。周辺の遺跡及び既往の調査については各報告書に詳しいので、ここでは本報告の８次調査の南側に近接する第１次及び第３次調査について簡単に触れておきたい。なお詳細は各報告によられたい。１次調査は井尻1-111-1他を対象として行われている。溝状遺構・水溜状遺構・土坑を検出する。台地の縁辺にあたり、包含層からは瓦が出土している。３次調査は井尻1-293-1他を対象とする。竪穴住居跡・井戸・土坑・掘立柱建物・溝を検出する。竪穴住居跡は弥生時代後期～古墳時代前期を主体とする。また南北溝からは７世紀後半～８世紀前半の瓦が多量に出土し、寺院(「井尻廃寺」)の可能性が考えられている。

Ⅲ　調査の記録

１．試掘調査

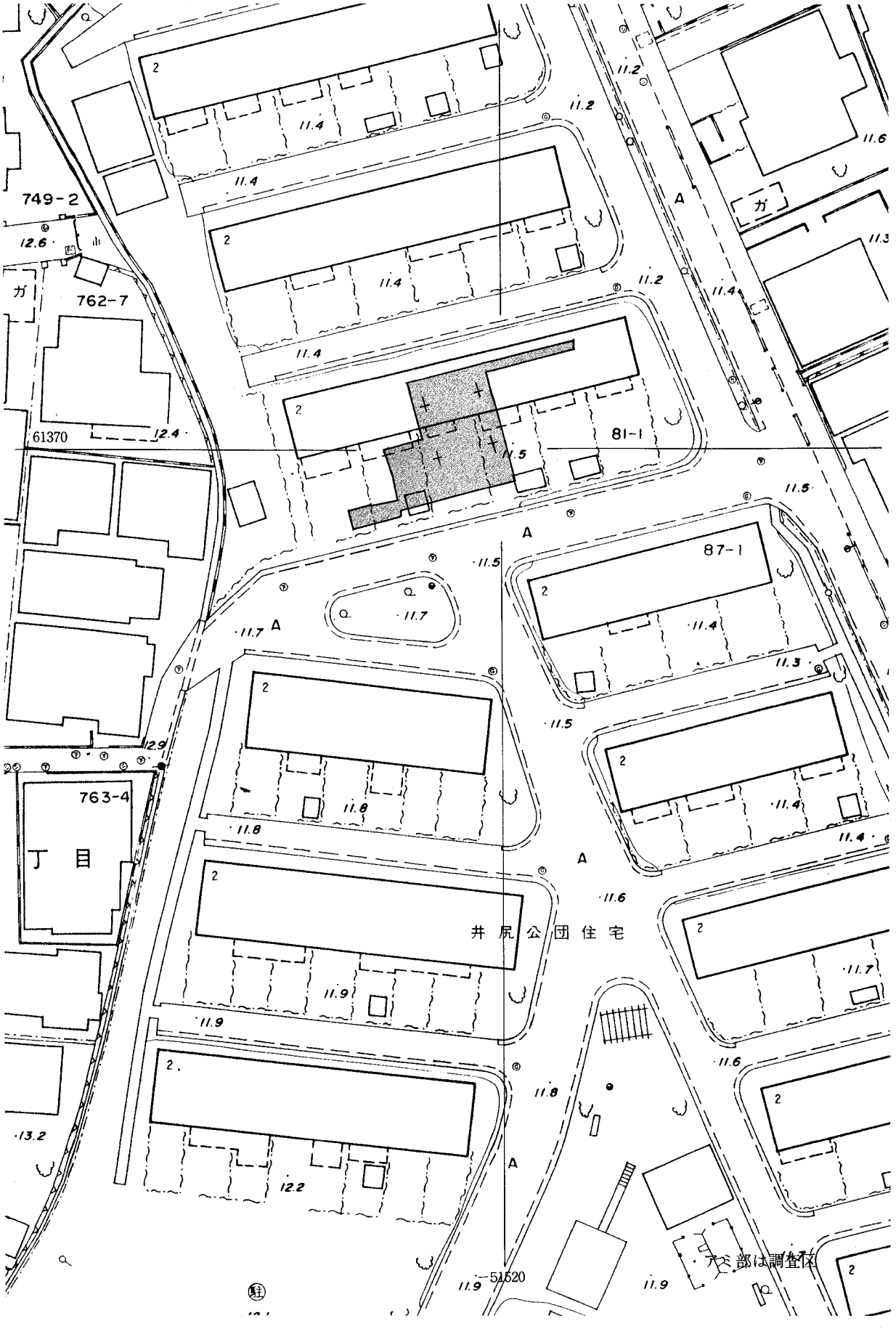
井尻団地建て替え事業についてはⅠでも述べたように平成３年度に全体の13,144m²について事前審査願が提出されたが、当時は試掘可能な場所がほとんどなく、都市計画道路予定地で予備的に試掘調査を行うのみであった。この結果台地上からはピットを検出し、浅い谷部分からは弥生土器・須恵器・瓦が出土している。隣接する１次・３次調査においても弥生時代～古代の遺構・遺物が検出されており、団地敷地内は縁辺部分にあたるものの同様の遺構が広がることが予想された。こののち事業の本格的な開始に伴い、平成７年に建て替え事業第１工区について試掘調査を行った。この結果１～４トレンチで台地の縁辺を確認し、２・３トレンチでは落ち際にピットを各２及び１基検出した。これより東には浅い谷が形成され、包含層が確認できた。中でも４トレンチでは弥生中期の遺物が多く認められた。この結果を受けて遺物が多量に出土した４トレンチ部分を中心として、台地の落ち際と包含層の調査を行うこととした。

２．調査概要

調査は４トレンチを設定した団地１ブロック約600m²を対象としたが、対象地西側に工事用のプレハブが建設されていたため、この部分が今回の調査不可能な地域となった。調査はプレハブ東側からバックホーによる掘削を開始した。当初予想された台地落ち際は見られず、谷部に形成された包含層を検出したため、この上面で掘削を止め東側に範囲を広げていった。東に10m程掘り進めたところで包含層からの遺物の出土が極端に少なくなり、遺物の出土は丘陵落ち際のみと判断しここで掘削をやめ、調査範囲を設定した。遺物は厚さ30cm程度の暗褐色土（包含層）から出土しているが磨滅が著しく接合できるものはほとんど無い。弥生時代～古代に至る遺物が出土した。出土遺物には弥生時代に属する甕・壷・石包丁・石剣、古代の土師器・須恵器・瓦がある。包含層除去後の谷は地山は灰褐色シルト（粗砂混じり）～きめの細かい灰褐色粘質土であり標高10.3～10.4mを測る。底面に傾斜はなくほぼ平坦で凹凸もほとんど見られない。

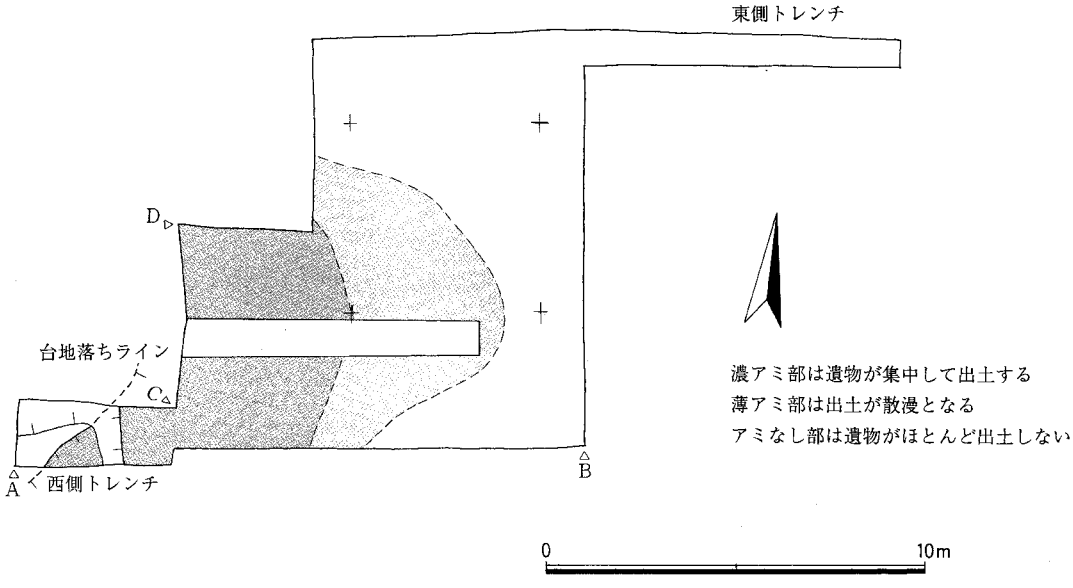
また台地のラインを確認するため、南壁に添って西側にトレンチを設定し南西から北東方向に伸びる台地の稜線を確認した。台地部分地山は灰褐色シルトで標高は10.7mである。また北壁添いにもトレンチを設定したが、遺物の広がりや谷の立ち上がり等は認められなかった。

第2図　対象地全体図及び試掘トレンチ位置図（1/1,000）

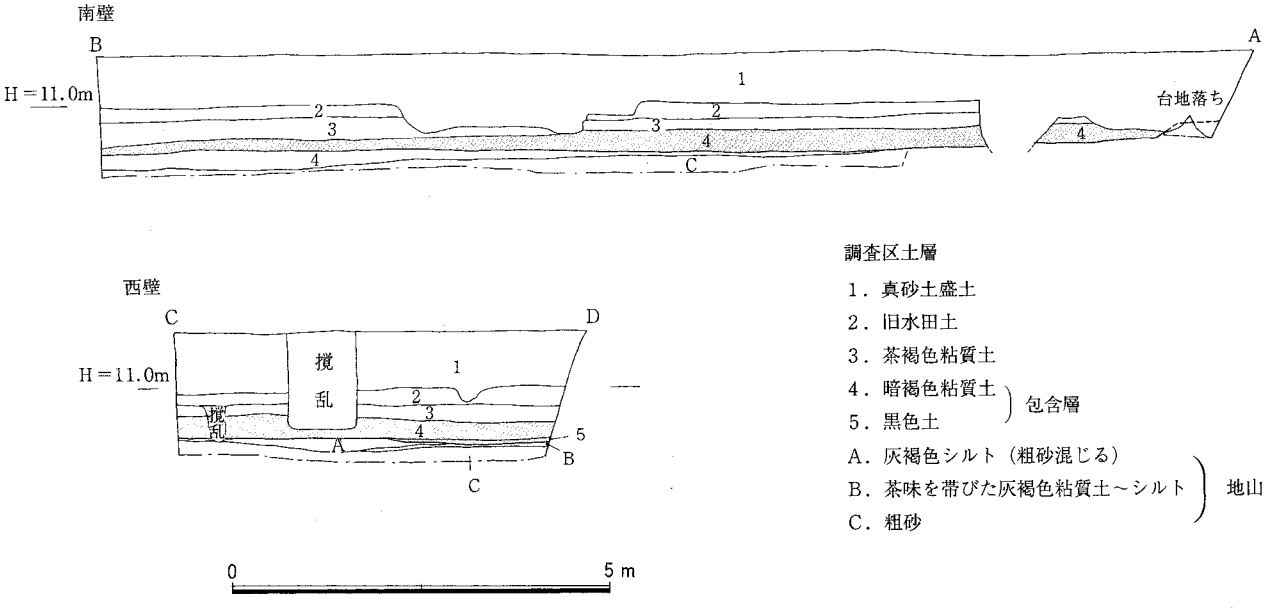


第3図　調査区位置図（1/500）

全体図（1/200）



土層図（1/100）



第4図　調査区全体図及び調査区土層図（1/200、1/100）

3．調査区土層（第４図）

調査対象地は現況で標高11.8mを測る。地表から60cm～80cmは旧団地建設時の真砂土の盛土が行われる。この下標高11mで厚さ20cmの旧水田耕作土、厚さ10～20cmの茶褐色土（床土）がある。調査区西側のトレンチではこの床土を除去した標高10.7mのレベルで灰褐色シルトの台地の落ちを検出した。東側の谷部には以下に厚さ30cm程の暗褐色土が堆積し包含層を形成している。また調査区西北部には一部に暗褐色土の下に５cm程の黒色土が認められる。これは谷内部の緩い自然の落ち込みの中に堆積したものであろう。谷部は標高10.3～10.4mを測り凹凸が少なく平坦である。谷表面は厚さ５cm～25cmの灰褐色土であるが、その下には粗砂層が堆積し湧水が著しい。このことから調査対象地は旧河道にあたり、水成堆積により形成された地形と考えられる。

4．出土遺物（第５～８図）

既述してきたように遺物は台地の落ち際でまとまって出土しており、これから離れると遺物はほとんど出土しない。また土器はいずれも磨滅が大変すすんだ小破片で取り上げ時に破損したものを除いて、整理作業で接合したものはほとんどない。遺物はいずれも原位置を保つものでなく、台地上からの転落・堆積であると考えられる。遺物には弥生時代に属する甕・壷・石包丁・石剣、古代の土師器・須恵器・瓦がある。弥生時代～古代に属する遺物であり、周辺の調査事例と一致する結果となっている。またこの中でも弥生時代中期に位置づけられる遺物が非常に多く、比較的調査での検出例が少ないものの該期の集落が台地上に広がっていることが想定される。

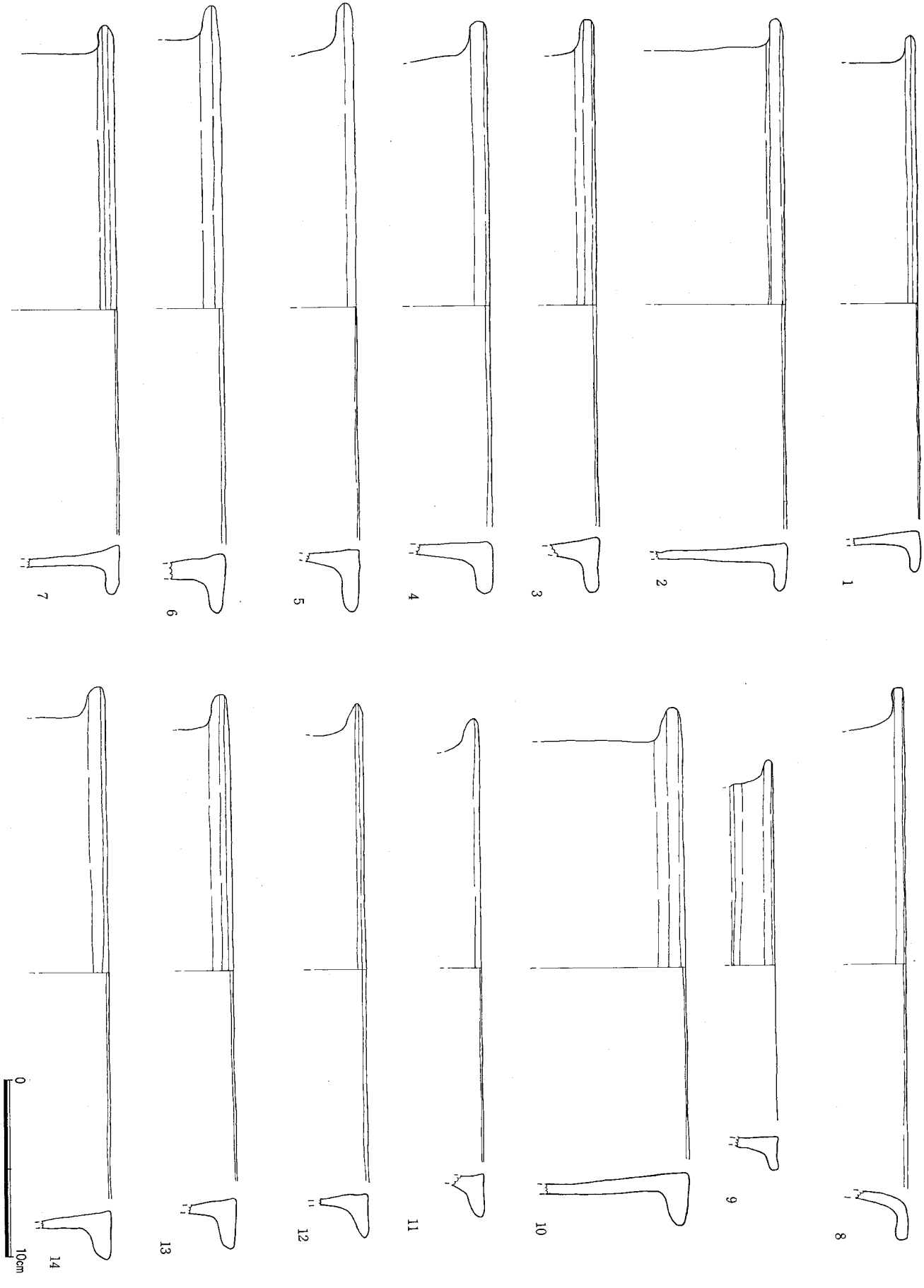
１～20は甕である。８は如意形の口縁部を有する。20は口縁部が「く」字状に屈曲し、内面が内湾する。また屈曲部内面が内側に突き出している。これ以外は内側の端面の張り出しや、外方への張り出しに違いはあるが、いわゆる逆Ｌ字状の口縁部を呈する。また９・19・20には口縁部やや下方に断面三角形の突帯を貼り付けている。21～30は壷である。21～23は鋤状口縁部を有する。24は端面を四角く納めるが、ナデにより端面には浅い窪みが生じる。25・26は袋状の口縁をなし、27は複合口縁となる。28・29は直口壷である。30は小型の壷胴部である。偏球形の胴部に断面三角形の突帯を貼付する。31・32は鉢である。31は口縁端部が外方に引き出され、丸まっている。32は緩く「く」字に屈曲する。33・34は高坏である。36～41は甕の底部である。いずれもやや上げ底を呈する。42～44は壷の底部である。

45は土師器の把手である。46～49は須恵器である。46は壷で肩にヘラ記号を有する。47は坏蓋である。天井部外面の2/3程は回転ヘラ削りを行う。48・49は高台付きの坏である。48は高台が外に張り出す。49は高台が屈曲部に近いところに付き、体部は真っ直ぐ外方に伸びる。50は平瓦である。外面に格子目のタタキが残る。

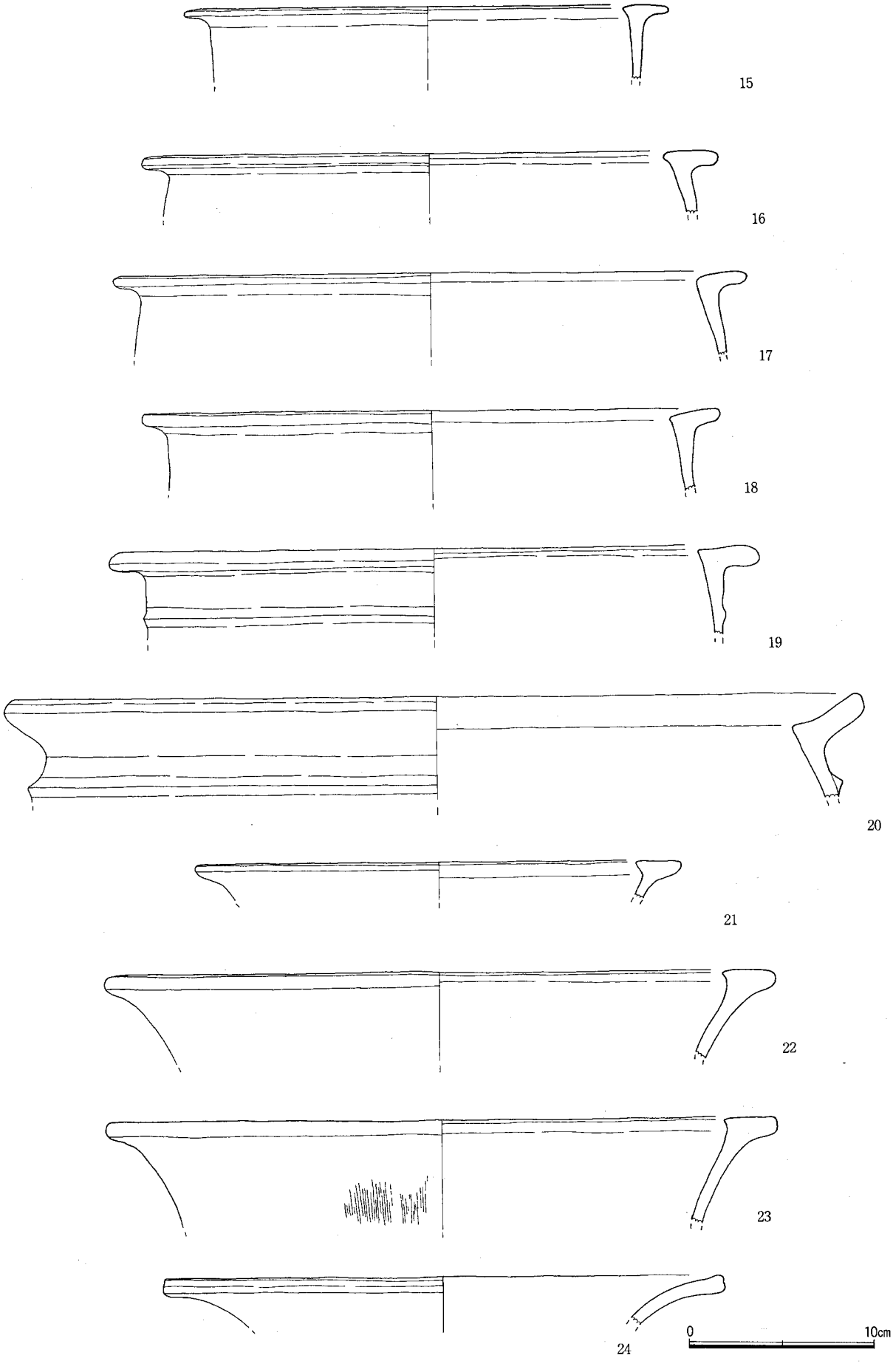
52～54は石器である。51はサヌカイト製の石鏃。52・53は石包丁である。52は頁岩、53は凝灰岩である。53は孔間2.5cmを測る。54は玄武岩製の石剣である。

5．小結

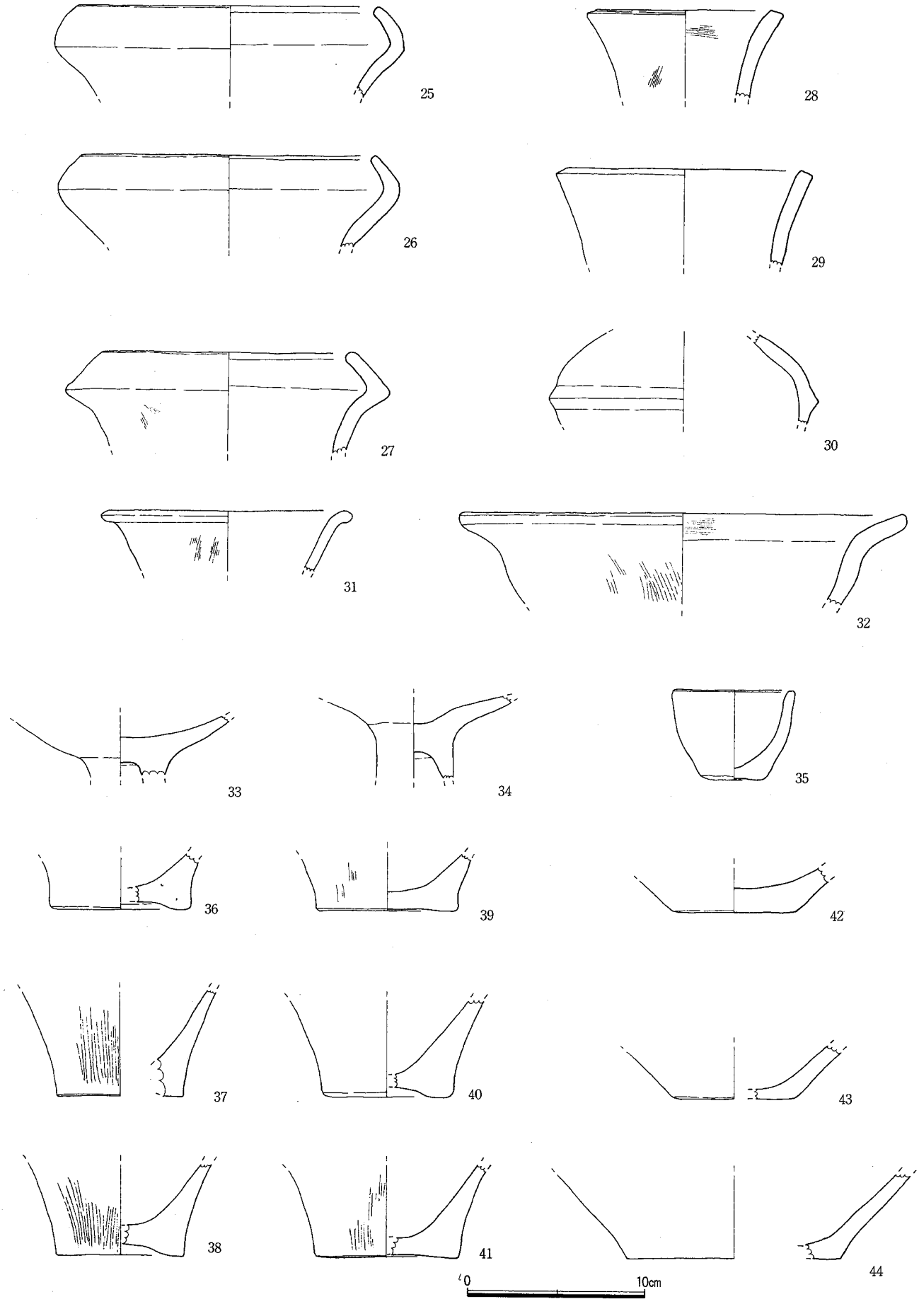
今回の調査では台地の縁辺に形成された包含層より弥生時代～古代の遺物が出土した。遺物はいずれも磨滅が著しく小破片であったが、周辺の遺構のあり方を推定する材料としての資料を提出したといえる。団地第２工区においても試掘によって遺構・遺物が確認されており、同様の調査結果が期待される。また今回の調査を含め井尻Ｂ遺跡群においては特に弥生時代～古代にかけての濃密な遺構分布が示されており、調査事例の増加により更に良好な資料が見られるであろう。



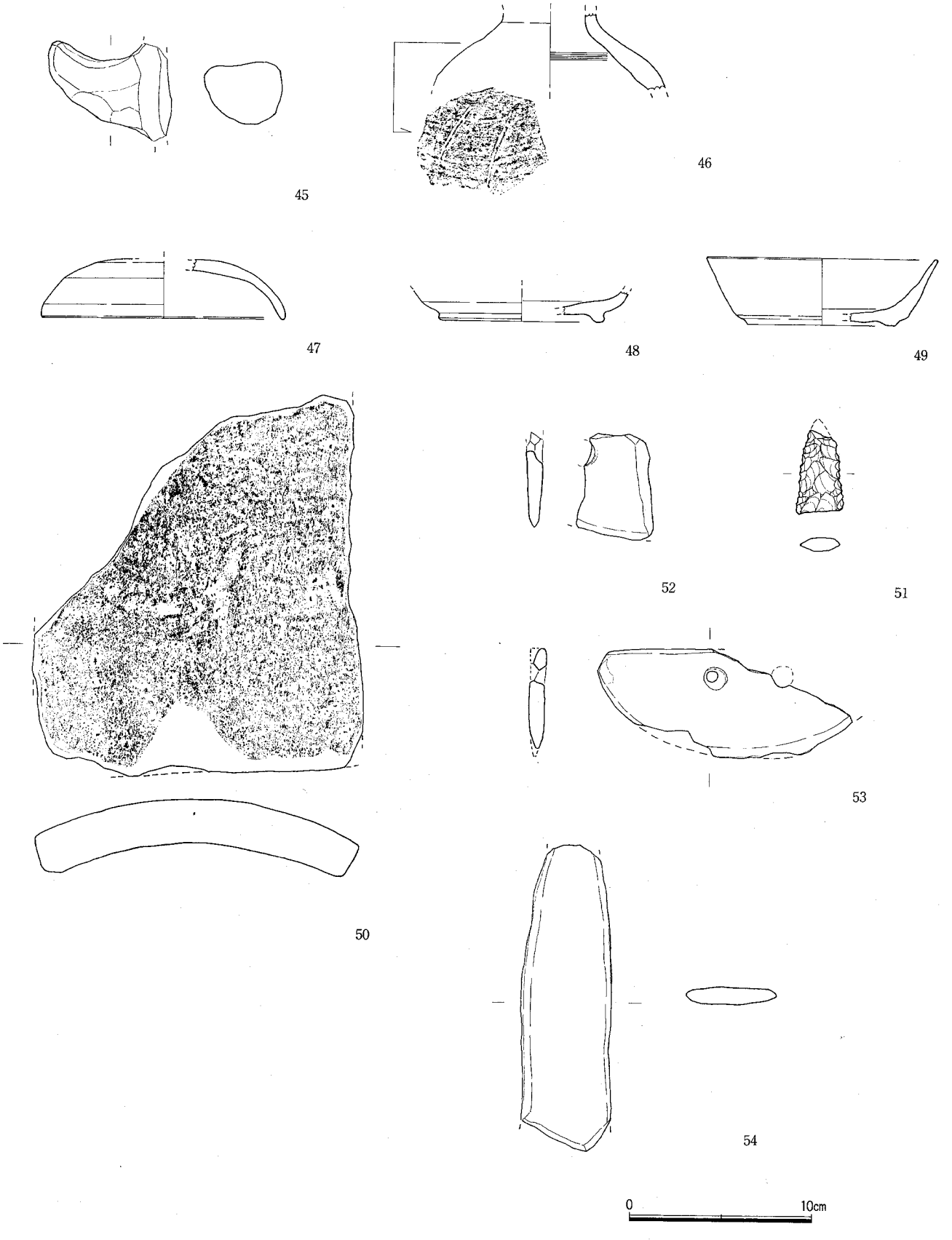
第5図　出土遺物実測図1（1/3）



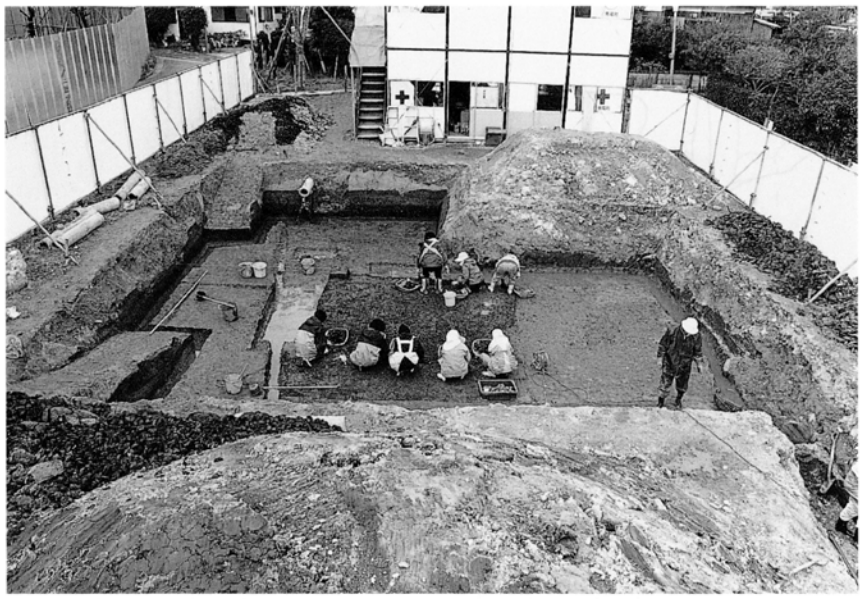
第6図　出土遺物実測図2（1/3）



第7図　出土遺物実測図3 (1/3)



第8図　出土遺物実測図4　(51～54は1/2、他は1/3)



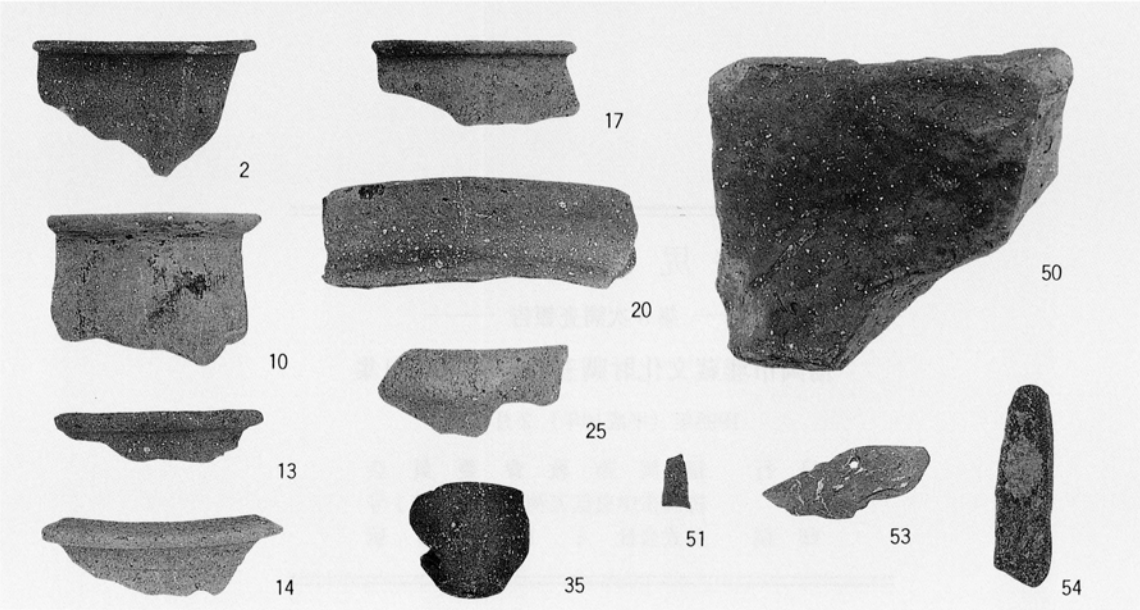
1　作業風景

2　調査区全体(東から)

3　調査区西壁土層

4　調査区南壁土層

5　西側トレンチ(東から)



6　出土遺物

井 尻 B 遺 跡 6

―― 第8次調査報告 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第571集

1998年（平成10年）2月10日

発 行　福 岡 市 教 育 委 員 会
　　福岡市中央区天神1丁目8番1号
印 刷　株式会社 ミ ド リ 印 刷